

涼やかな風が吹く森の中を、一人の女性が歩いていった。

それほど深くは無く、見上げれば青空が覗けるような、清廉な雰囲気を称える森である。遠くから虫や鳥の鳴く声が聞こえてくる場所に人の気配は無く、だからこそ女性は無用心に、周囲を警戒している様子はない。

時折口笛を吹く様子は長閑な雰囲気を漂わせ、女性が進むごとに肩まである栗色の髪が陽気に揺れる。

年の頃は二十歳を僅かに超えるくらいだろうか。

陽気な雰囲気を宿す柔和な瞳には希望を宿し、まっすぐに前を向いている姿はしっかりとした意志の強さを感じさせる。

友人、知人からは童顔と称される表情にはわずかな笑みが浮かび、その足取りは見ている方も気持ちよさが浮つきそうなほどに軽い。

身長は同年代の女性たちの平均程度だろう。

大胆に露出した肩から先は白磁の人形を連想させるほど肌が白く、スラリと長い。筋肉質ではないが、しかし健康的な美しさがあり、日焼けの一つもしたことが無いのだろうと想像させる。

肩から視線を上げると白い首筋が覗き、艶やかな曲線はあくまで優美。

綺麗な卵型に整った顔は美しいよりも可愛い、活発——そんな印象を与え、引き付ける魅力ある美貌の持ち主だった。

玉の肌は肩だけでなく二の腕までが露わになり、袂のある白袖が手首までを隠している。

奇妙な意匠だった。

首から胸元までを心許ない細紐が飾り、肢体の前面を隠す白布を吊っているだけ。下着の類は見えず、背面は肌が丸出しの状態。

下半身も丈の短い赤のスカートがあるだけで、その下には右足だけが黒のニーソックスに飾られた、左右非対称の健康的な太ももが露わになっている。

肉感的に引き締まった脚はすらりと長く、野山を駆け巡る雌鹿のようだ。

蠱惑的にくびれた腰とは反対に、スカートを押し上げる大きなお尻は、街を歩けば男たちの視線を釘付けにするだろう。

しかし、何より目を引くのは大の男の手からも溢れてしまうだろう、豊かな胸の丘陵である。

白い薄布を挑発的に押し上げた二つの膨らみの迫力は圧倒的で、彼女が一步步くだ

けでプルンと震え、その柔らかさ、そして元の形に戻ろうとする弾力を強烈に誇示している。

男たちの視線を一身に集めるような魅力的な肢体は栗色の髪を持つ少女の服装と森の清廉な雰囲気も相まって、神職の子女のように錯覚させる。

一夜……それが、この女性の名前である。

彼女は右足を守る足甲と、背にある自分の背丈ほどもある武骨な大剣を僅かに鳴らしながら、森の奥へと進んでいく。

目的の場所は、そこからしばらく進んだ場所にあった。洞窟だ。

入り口は見上げるほどに高く、一夜が五人並んでも余裕があるほど幅が広い。初夏の暖かな日差しの下にあって、洞窟から流れ出る冷気を孕んだ空気が頬を撫で、その冷たさに一夜は丸出しの肩を抱いた。

「う……結構寒い、かも」

彼女の目的は、この洞窟の奥にあった。

6

それは物ではなく、魔物。

元は良質な鉄が採れる鉱山だったが、それも昔の話。鉄鉱石を採り尽くされた洞窟は廃坑となり、人が寄り付かなくなったことで魔物の住処へと変わり果てた——今の世では珍しくもない事だ。

そして、廃坑に住み着いた魔物が近隣の村々を襲い、家畜を奪い、畑を荒らすようになっただけの事。この世界ではよくあることだ。

一夜はその魔物退治を頼まれた剣士である。背にある大剣は飾りではなく、見た目とは裏腹にその細腕から繰り出される斬撃は大地すら抉る威力を持っている。

そんな一夜にとって、依頼された魔物——ゴブリンは雑魚ともいえる相手であった。緑色の皮膚に、身長は人間の子供程度。一夜の腰に届くか、と言ったところ。

腕力こそそれなりだが、知能も低く、群れなければ危険ではない相手。

情報では、ゴブリンの数は五匹程度。運が悪くとも、十匹には届かない程度の数だろうと一夜は考えていた。

先ほどゴブリンに襲われたという村を見てきたが、畑にあった足跡の種類はそれほど多くなかった。

5

人間とは違う魔物とはいえ、しかしその足跡には個性がある。
靴を履く習慣が無いからこそ足跡の違いは隠せず、その総数が多くない事を一夜へ
教えていた。

「さて、それじゃあ行きますか」

一夜は腰の荷物袋から松明を取り出して、火をつけた。

そのまま、気負った様子も無く洞窟内へと進んでいく。敵の正体が分かっている、
大まかだがその数も知っている。

何も恐れることは無かった。

「うう、さむ……」

松明の明かりが洞窟内を照らすと、そこは初夏の明かりに包まれていた外とは別世
界。

暗く、冷たい空気が流れ、じめっとした雰囲気肌が肌を撫でる。



一夜は左手に松明を持ち、右手はいつ襲撃されても対応できるよう背にある大剣の柄を握ったまま洞窟を進んでいく。

足取りは暗闇の向こうを警戒するように重くなり、呼吸はゆっくりと、長く。

元は鉱山だったという事もあり、洞窟の地図が近隣の村にはあった事も幸いだった。洞窟内の地図は頭の中に入れており、それによれば道は一本、それほど深くもない。

普通に歩けば半日もしないで隅々まで探索し、入り口に戻れる程度の広さだ。

だから、ゴブリンの襲撃を警戒していても、一夜は暗闇に恐怖を抱いていなかった。壁には時折、鉱山だった頃の名残だろう、使い古された松明が飾られている。一夜はその松明に火を灯し、洞窟内の明るさを保っていく。

それが十度ほど続いただろうか……暗闇の先で、ガラ、と岩が転がる音がした。

(この先か)

一夜は右手にある大剣の柄を強く握り、抜いた。

その細腕には不釣り合いな武骨な剣だが、しかしそれを片手で構える。その愛らしい容姿に似合わず、かなりの怪力だ。

そして、剣を構えたまま一夜は奥に進み――。

「ふっ!!」

天井から降ってきた埃が美しい栗色の髪を汚し、肩にまで掛かる――その瞬間、一夜は後ろへ跳んで大剣を握る手に力を込めた。

ゴブリンだ。

廃坑に住み着いているうちの一匹が天井に張り付き、獲物が真下を通りかかるのを待ち構えていたのだ。

しかし、罟を張ったとて所詮は低能なゴブリンである。

埃や蜘蛛の巣、細々とした身の回りの物にまでは気が向かず……結果、その小さなものを見落として気付かれてしまう。

「ギィィィィィィィィ!!」

「もう、やっと見つけた」



ゴブリンは威嚇の声を上げたが、一夜の方はようやくと目当ての魔物を見つけたことで僅かにだが気の抜けた声を漏らしてしまう。
警戒こそ解いていないが、しかし相手がゴブリンという事もあって気持ちに驕りがあるようにも感じられた。

——けれど、それもしょうがない事だろう

頭上から落ちてきたゴブリンの攻撃を避けると、愛用の大剣を片手で豪快に抜き放ち、抜刀の勢いと大剣の重量を乗せて振り下ろす。

ゴブリンの頭部を撃って床に叩きつけた……埃が舞い上がり、一瞬だけ息が詰まる。

「けほっ」

小柄なゴブリンはただの一撃で頭蓋を割られ、絶命していた。
圧倒的な臂力の差。

群れなければ脅威とはなりえない最下級の雑魚であるゴブリンが相手だからこそ、

一夜は警戒こそしているものの、けれど心のどこかで油断してしまっていた。それが態度に出ているのだが、それは決して悪い事ばかりではない。気持ちに余裕があり、僅かな事——例えば先ほどの、落ちてきた埃の不自然さに気付けるような視野の広さ、洞窟という閉鎖空間での緊張感に精神が摩耗しないといった利点もある。

「一匹見つけたってことは……」

一夜が周囲を見回すと、岩陰に隠れていたゴブリンを見つけた。仲間が殺されたことに動揺したのか、洞窟のあちこち——松明の光が届いていなかった岩陰から、隠れていたゴブリンが顔を覗かせている。その数、四匹。

(五匹だったか……一匹、数え間違えちゃったな)

そう考えながら、一夜は松明を床に落とす。油を吸った松明はその程度の衝撃で

は火を消さず、暖色の明かりで周囲を照らす。

一夜は、愛用の大剣を両手で構えた。

雰囲気が変わる。

陽気で穏やかな雰囲気が消え、歴戦の剣士としての顔が現れる——ゴブリンは雰囲気の変化を察して後ずさったが、しかし逃げることは無かった。

ここは彼らの巣であり、家なのだ。

逃げる場所などありはしない。

自分たちの家に入り込んできた異物に対し、襲い掛かる。

「シギアア——ッ!!」

甲高い雄叫びは、耳に痛い。一夜は顔を顰め、しかし向かってきたゴブリンへ躊躇うことなく大剣を振り下ろした。

その一撃はゴブリンの頭蓋を割るにとどまらず、頭頂から股間までを一刀のもとに両断。そのまま刀身が地面へ叩きつけられ、血と肉が周囲へ飛び散るほどの衝撃。

次に飛び掛かろうとしたゴブリンは仲間の惨劇に足が止まり、一夜はそのゴブリン

重い衝撃に大剣を持つ手首にまで衝撃が届く。しかし、そのまま器用に柄を操って衝撃を逃すと、今度は大剣を回した勢いでゴブリンの側頭部を打つ。
 ガン、と小気味よい音とともにゴブリンはたたらを踏んで……そのまま気絶。顔から倒れ伏すと、最後の一匹はその惨状に恐れをなしたのか背を向けて逃げ出した。

「あ、ちょっと!？」

「ギイイイイイ………」

一夜は気絶したゴブリンと逃げるゴブリンを交互に見比べ、逃げたゴブリンの後を追った。

気絶している個体はすぐには目覚めないだろうと判断し、それよりも暗い廃坑の中で身を潜められたら探すのが厄介だと考えたからだ。

すぐさま松明を拾い、逃げたゴブリンを追いかける。

けれど小柄なゴブリンは一夜よりも素早く、あっという間に見失ってしまった。

「もうっっ」

の懐に向かって飛び出すと、大剣を横に薙いだ。
 腕力だけではない。踏み出した足を支点に腰を回し、大剣の重量に飛び込みの勢いを乗せての一閃。

丈が短い赤のスカートが腰を回した勢いで舞い上がり、その下にある清楚な雰囲気とは真逆の黒い紐パンツが丸見えになる。

汚れが目立たず、紐をほどこけば簡単に解ける機能性と、可愛いレースが施されたデザイン性も両立しているという理由で選んだ下着だった。

一夜が纏う雰囲気合っていない大人びた下着はそのギャップもあってなんとも言えない魅力がある。

見る者こそ居ないが、下半身の涼しさに自分の状況を察した一夜は、剣を振り抜いた勢いで左手を放し、咄嗟にスカートを抑えた。

それだけの隙を見せながらも横薙ぎの一撃はゴブリンの上半身と下半身を生き別れにし、その隙に背後から襲い掛かろうとしたゴブリンの攻撃は冷静に一步下がって避け、続けざまの連撃は大剣の腹で受け止める。

一夜の背丈の半分ほどしかない身長だというのに、ゴブリンの腕力はなかなかのものであった。

可愛らしい声で悪態を吐いて地面を蹴る。

その衝撃で豊満な胸がタブンと揺れ、一夜は自分の胸元を見た。激しく動いたことで時折仕事の邪魔にすら感じる大ぶりの果実を二つ詰め込んだような自分の胸、その谷間には汗が溜まり、少し気持ちが悪い。

胸を隠す白布を軽く持ち上げて空気を送ると冷たい空気が服の中に入り込んだ。その心地良さに気持ちを落ち着けながら、一夜は廃坑の暗闇に向かって歩き出した。

(あと一匹だし、早く帰りたいな……)

周囲を見回し、先ほどよりも警戒しながら奥へ進む。

向こうも一夜を脅威だと警戒し、身を潜め、逃げるか襲い掛かるか——その準備をしているはずだ。

足取りはゆっくと、手には剣と松明をもって。

そうして進んでいると、廃坑の奥でカツンと乾いた音が響いた。

「こっち……?」

見掛けた壁掛けの松明に火を灯し、光源を確保。

すぐには音の方に向かわないのは懸念だ。どんな罠が用意されているか分からないのだから。

「ギイ!!」

「あ、居たっ!」

一夜はそうやって自分に有利な状況を維持しながら廃坑の奥へ進むと、隠れていたゴブリンが松明の明かりに向かって威嚇の声を上げる。

ようやく見つけた最後のゴブリンに大剣の切っ先を向けると、またゴブリンは奥に向かって逃げ出した。

今度こそ逃がすまいと、一夜も走り出す。

「きゃあ!？」

——途端、足が何かにつっ掛かり彼女は盛大に転倒した。
何とか受け身こそ取れたものの、大剣と松明を手放してしまう。
暗がりの中なので落とされた松明の位置はすぐに分かったが、大剣の位置は分からない。

「っ……うう、なに？」

松明が作る光の中には、一本の紐が浮かんでいた。ゴブリンの罠だろう。足の高さに紐を引いた、古典的な罠だ。
そんなものに引っ掛かってしまった情けなさに一夜が肩を落とすと、次の瞬間、その紐がまるで意思を持っているかのように動き、暗闇の中に消えていった。

「へ？」

次にその周囲——暗闇の奥から、グジュ、と。

19

形容しがたい……例えるなら、粘り気のある液体がぶつかり合ったような、生理的に気持ち悪い音が響く。

(なにか居る……)

その“なにか”を刺激しないよう、音を立てずに手を動かして落とされた愛用の大剣を探す。
けれど見つからない。

(うう、結構遠くに転がっていつちやったかな?)

走ってゴブリンを追いかけたせいで壁掛けの松明に採火を灯しておらず、光源は落ちていた松明だけという状態。
いかに一夜が優れた剣士であっても、光が無ければ敵の位置も分からず、体術だけには限界もある。

ゴブリンが相手だからと、油断していた自分に情けなくなり、背中に冷たい汗が流

20

れたのを自覚した。

意を決して、まずは松明に手を伸ばす——が、一夜の手が松明の柄を掴むより早く、暗闇から伸びた紐……触手が松明を弾き、遠ざけてしまう。

「今のは——」

一瞬すぎて一夜は確信が持てなかったが、ただの紐というわけではないだろうと警戒感を強める。

そして遠くで、まるで暗がりを警戒する一夜をあざ笑うかのように松明が持ち上げられた。

明かりの中に浮かんだ輪郭から、それがゴブリンなのだと分かる。

追い詰めた相手に、今度は馬鹿にされている——そんな気がして一夜は立ち上がった。

「もう、逃がさないからっ!!」

21

22

声を上げるとゴブリンが逃げ出した。

けれど今度は、向こうが松明を持っている。

明かりを追いかければ見失う事も無い——はずだった。

「きゃん!？」

しかし、また足元に引かれた転倒用の罠に足が引っ掛かり、一夜は盛大に転倒してしまう。

豊満な胸がクツシヨンとなって顔から倒れる事だけは免れたが、赤いスカートは完全に捲れ上がり、暗闇の中で黒い紐パンツが丸出しという情けない格好だ。

「うう……」

もう情けないという事すら感じる余裕も無く、倒れたままとりあえず捲れ上がったスカートだけは元に戻そうと右手を後ろに回す——と、手首に何かが巻き付いた。

「え!？」

暗がり、何が起こったのか分からない。

驚いた声を上げると、今度は左手に同じものが巻き付く。

ネバついた紐……のようなものだ。

その太さは一夜の手首の半分ほどはあるだろう。力強く、弾力があり、そしてキモチワルイ。

ヌルヌルしていて、まるで蛇のような器用さで一夜の手首、そして肘の近くまで一気に巻き付いた。

「な、なにこれ!？」

遠くにあるゴブリンが持つ松明。その僅かな光源を頼りに目を細めると、それが触手なのだと分かる。

暗闇の中では分からないが、毒々しい濃い緑色の触手だ。

その触手が吐き出す液体の匂いは頭が痛くなるほど甘い——普段は近くの植物から

蜜を集めるか、体液の甘い香りで虫を惹き寄せ捕食する魔物。ローパーだ。

「ゴブリンだけじゃなくて、ローパーまで洞窟に居たなんて」

廃坑の入り口にゴブリンの足跡しかなかったから、完全に見落としていた。

そもそも、ローパーは動き回るようなことはせず、風によって種が運ばれ、芽を出したなら一生をその場所で過ごすような魔物だ。

足跡などあるはずも無く、強風かゴブリンが運んだのかは分からないが、ほとんど餌が無いこの場所に居ただけの事。

そんな不運。

……ローパーにとっても、一夜にとっても。

「このっ!」

だが、ゴブリンと同様、ローパーもそれほど危険度が高くない魔物だ。

植物なので火に弱く、触手こそ厄介だが生えている場所から動けない。遠くから火

矢を射るなり松明を投げつけるなりで簡単に倒すことが出来る。
普通なら。

しかし一夜は両腕を拘束され、火を起こせるものは何もなく、触手を斬るための武器すらどこに落ちているか分からないのが現実だ。

腕に力を込めて触手を引き剥がそうとしたが、その程度で捕らえた獲物を放すはずもない。

洞窟の奥——ローパーが産まれてこれまでで、初めて手に入った大きな餌。いったいどれだけの時間、この洞窟の奥で過ごしたのだろうか。

一夜からは見えない暗がりの向こうには、通常のローパーよりも三倍は巨大な魔物が存在していた。

壺のような形状で、口となる場所は蛸のよう蠢いている。

その周辺からは六本の触手が伸び、それらが下着を丸出しで転倒している一夜の四肢に絡みついていく。

「やっ、ちょ——やめてよっ!？」

25

26

見えなくても自分が何をされているか理解した一夜が声を上げている間にも、今度は両足に触手が絡みついてくる。

両の手足と両足。計四本。

足首から膝、そして肉付きの良い太ももにまで触手が這い上がると、その感触と粘り気のある粘液の気持ち悪さに一夜は全身に鳥肌が浮かんた。

(そんな、何本あるの!?)

両手両足を触手に拘束され、一夜が困惑する。

暗がりの中で敵の姿が分からないという不安から、とにかく自由になろうと手足に力を籠め、全身を暴れさせる。

しかしその程度で弾力のある触手は千切れず、拘束が解けることは無い。

むしろ、暴れたことで厚布一枚に包まれた形の良い乳房が地面に擦れ、硬い地面に肌が擦れる痛みに顔を蹙めてしまうだけ。

すぐに息が乱れて抵抗が止むと、さらに触手は両腕の肘にまで絡みつき、余計に一夜の自由を奪っていく。

「くっ、この……っ」

柔和な笑みを浮かべていた表情を強張らせ、まずは片腕だけでも解放しようと右腕に意識を集中する。

すると、遠く——松明を持って逃げていたゴブリンが、その手にある唯一の光源を一夜の傍へ投げつけた。

その痴態を見るためだ。

暗闇の向こう……息遣いで、そこにゴブリンが居るのだと分かる。

松明の淡い光の中には、四肢をおどましい濃い緑色をした触手に拘束された一夜だけ。まるでその無様な姿が見えるようになるまで待つていたかのように、触手が一夜を持ち上げた。

「え、ちょ、ちよっと!？」



そのまま膝立ちの体勢にすると、丸見えだった黒の下着がスカートに隠れる。そうして両腕を頭上に移動させ、無防備な脇を曝け出させる。膝立ちのまま胸を張るような体勢を強制させられると、嫌でもその豊満な胸が強調された。

ゴブリンとの戦闘、そして松明を片手に逃げた魔物を負ったことにより一夜の肌には汗が浮かび、それが松明の明かりを反射して濡れ光る。

その巨乳ゆえか、特に胸元と脇——深い陰影を作る胸の谷間は白布が灰色に変色し、脇には疲労だけでなく魔物に拘束された緊張からより多くの汗が浮いている。

魔物にどういう意図があるのか分からないが、そんな自分の姿を考えると一夜は頬が熱くなるのを自覚した。

特にゴブリンは、自分のこんな姿を見るために松明を投げたのだと理解しているだけに、これからの事へ恐怖するとともに、羞恥の気持ちが強くなってしまふ。

「ふう……」

(だめだめ、落ち着かないと)

そんな中で、一夜は深呼吸をした。

気持ちを落ち着けて冷静にならなければ、現状の改善はあり得ないと誓いしてのことだ。

深呼吸をして気持ちを落ち着けると、どうにか逃げる方法はないかと周囲を見回す。すると、暗闇の中にうっすらと鈍く光るものがある。

愛用の大剣だ。

松明の明かりで照らされる金属の光に、一夜は僅かに表情を明るくした。

(少し遠くに転がってるけど……)

手を伸ばして届く距離ではない。拘束されている足も無理だ。

現状はなす術の無い状態。しかし抵抗する手段を見付けたことで、一夜の胸に希望が湧く。

(なんとか、剣の傍まで近づけたら)

「——ひっ！？ な、なに！？」

ゴブリンは肉や野菜。そのゴブリンほどの消化能力が無いローパーは花の蜜や小さな虫を溶かして食う。

そう、ローパーにとって液体や小さくて柔らかいもの——人間の体液や排泄物は食料なのである。

運動して汗をかいた一夜は、廃坑内に芽を出し、地中の水分の味しか知らないローパーにとって芳醇な香りを放つ極上の料理。

初めての獲物に勝手が分からず困惑していたが、手足に絡みついて肌の上に浮いた汗を舐めとっただけでも今まで味わったことのない味なのだと理解し、それが溜まり、服にまで染みついた胸元にローパーはその触手を伸ばした。

「ひっ!?!? ちょ、ちょっと!?!?」

触手で殴られると思っていた一夜が驚きの声を上げる。

なにせ、人を襲う魔物が自分の胸元——厚手の白布の両脇から入り込んできたのだ。厚布の横から大胆に触手が侵入し、大きな陰影を浮かばせる下乳を通り、そのまま深い谷間の間を抜ける。

何か使える物はないかと、もう一度周囲を見回した時だった。

暗闇の向こうから、さらに二本の触手がその姿を現した。先端に桃色の蕾を持つ、濃緑色の触手だ。

表面からは糸を引くほど粘り気のある粘液を滴らせ、そして空中で蛇のような緩やかさで蠢いている。

その威容に一夜は悲鳴を上げそうになり、必死に恐怖を飲み込んだ。

(先端は柔らかそうだし、叩く……のかな?)

それなりに太く、弾力もありそうな触手で叩かれると痛そうだな、と。

せめて現状を明るく考えながら、一夜は触手から目を離して周囲に使えないものがないかを探そうとする。

しかし、触手の目的は一夜という女剣士を痛めつける事ではない。

この魔物にとって、蜜や虫を採るのは生きるためだ。つまり、食事である。生きるだけなら水分だけで事足りるが、人間がそうであるように、魔物にも嗜好がある。

一夜からすると、突然胸の谷間から二本の触手が顔を出したようなものだ。先端にある桃色の蕾が眼前で揺れ、すぐにまた服の中に消えていく。

「え？ え？」

そのまま二本の触手は交互に胸の谷間を前後し、一夜の汗を舐めとりながら、代わりに自身の体液を豊満な乳房に擦り付け始めた。何度も、何度も。

触手が動くたびに、純白の厚布の下でパン生地のように乳房が形を変え、しかし若く弾力のある肌はすぐに元の形へ戻ろうとする。

触手を押し戻すほど張りのある乳房は何度も触手の表面に擦られ、普通なら痛みを感じていただろう。

しかし、触手が分泌する糸を引くほど粘り気がある体液が摩擦による痛みを消し、それどころか大量に吐き出された体液は胸の谷間にとどまらず、胸全体、そして肌を通して臍までも粘液まみれにしてしまう。

しばらくすると服の下で捏ねられていた乳房はグチュグチュと卑猥な音を響かせる

ようになり、純白の厚布は透けてうっすらとその下にある肌の色――そして、乳房の中央にある艶やかな桃色の乳輪の姿すら透けて見えるようになる。

「ん、くっ……」

(何なの、この触手っ)

美貌を屈辱にゆがめながら、一夜は内心で毒づいた。

決して気持ち良いわけではない。

ただただ気持ち悪い。粘り気のある体液も、触手の動きも。そして、自分の胸を揉む糸が理解できないという事が、なによりもキモチワルイ。

粘液が放つ悪臭と魔物への嫌悪に眉を顰めながら、しばらくすると触手の行動が脅威ではないと判断した。

痛みや、粘液からの毒性なども感じられない。

一夜からすると肌の表面に触れられるだけの、無駄な行為。

だから一夜は自分の武器を何とか回収できないかと周囲を見回し、あえて触手の動きを無視することにした。

たら仲間が助けに来てくれるかもしれない。
 そう前向きに考えるようにする。
 人を襲って殺すゴブリンではなく、どういう意図かは分からないが肌を撫でるだけのローパーに捕まったというのも、一夜には希望があるように思えていた。
 とりあえず、殺される危険はゴブリンよりも低いのだから。

「んっ……」

(それにしても、この触手。なんで胸ばっかり触るんだろ……?)

一夜が何とか逃げ出そうと藻掻いている間も、服の下に潜り込んだ触手は執拗に豊かな乳房を責め立てていた。

弾力のある表面に血管のような筋がいくつも浮かぶ触手が乳房に絡みつき、這い回ると、粘液の影響もあって根元から乳首がある先端へ押し出されるような行動となる。畜産業に従事した者なら、それはまるで牛の乳を搾るような行動に見えただろう。

根元から先端へ。

乳房から乳首へ。

自分の胸を嬲られる——意識すると気持ち悪いので、さっさとこの洞窟から抜け出したいという気持ちからだ。

周囲には使えそうなものは何もなく、足元の松明くらい……。

(何とか、足の触手を松明の火で焼けないかな?)

両足に力を込めて股を閉じようとしたが、触手の方が力は強く、足を閉じることはできなかった。

けれど、他に使えそうなものも無く、今は無理でもローパーが何かの拍子に油断したら——。

(うう……持久戦、かあ)

そう考えると、一夜は完全に拘束された状態だというのに気の抜けた表情で項垂れた。

まあ、村の依頼を受けたことは少し調べたら分かるだろうから、最悪、しばらくし

ゆっくりと、何度も、繰り返される。
何度も。何度も、何度も。

「ん——」
(どうしょ……)

最初は何も感じていなかった乳辱だったが、一夜も年頃の女である。
執拗に乳房を愛撫——触手にそのつもりは無いのかもしれないが——されると、嫌でも性感を覚えてしまう。

最初は痛みが無い事に安堵していたが、時間が経つと逆に、逆に痛みが無い事で触手の動きに意識が向く。集中する。

刺激を無視できなくなつて、しばらくすると胸からの刺激に集中することに気が付き、首を振つて凌辱される胸の感触を頭から追い出す

こんなものは生理現象であり、一夜の意思でどうこうできるものではない。

そうと分かつていても、やはり魔物に嬲られて感じてしまうというのは、真つ当な人間としては思う所があるのだろう。

一夜は少しでも胸からの刺激を和らげようと、身動きをした。
膝立ちの状態で、動かせる範囲はそう広くない。

右の膝当てが地面と擦れて金属音を立て、揺れたスカートが小さな衣擦れの音を響かせる。

(どうして……胸、ばっかり……)
「はっ、はっ……」

最初は何んて事の無い刺激だったというのに、こうも延々と続けられるとは想像もしていなかった

触手の行動は最初の中から何も変わっていない。

乳房に巻き付いて、根元から先端へ押し出すよう、揉んでいるだけ。
変化したのは一夜の方だ。

頬は赤くなり、唇は半開き。その唇の隙間からは綺麗に並んだ白い歯と、唾液に濡れた小さな舌がちらちらと覗く。

まるで熱病に冒されたようにうつつすらと開いた瞳は涙に濡れ、身動きをする感覚が

だんだんと短くなっていく。

特に顕著なのは、腰である。

拘束されていないという事もあり、動かせる箇所がそこしかない。

結果、何もされていないというのに腰は僅かに前後し、赤いスカートがゆらゆらと揺れている。

触手の巨乳責めは、終わりが無いように延々と続く。

(まさか……助けが来るまでずっと、なんてことはないよね……)

一夜の頭にそんな考えが浮かび、ゾツと、背筋に冷たい汗が流れた。

魔物の生態になど詳しくないが、女を嬲るローパーというのは初めて遭遇した。

そんなローパーが今後、どのような行動をするかなど予想もできない。

ただ、もしこのままずっと胸を嬲られ続けたら……命の危険こそないけれど、自分はどうなってしまうのだろうかという不安が頭を過ると自分でも分かるほど口元が強張った。

「ねえ、ちょっと。離してくれないか、なー……なんて」

痛めつけてくる様子が無いからか、口調は少し軽い。

けれど、触手はなおも一夜の巨乳を揉み続けた。

更に長い間。ずっと。

「んっ……んっ……」

どれくらい時間が経過しただろうか。

洞窟の中に居る一夜には時間の経過が分からないが、しかしその肢体は最初とは明らかに反応が違っていた。

胸を揉まれるたびに腰だけでなく肩まで痙攣が伝播し、顔は伏せたまま周囲を調べる余裕もない。

純白の厚布に包まれたままの胸は触手に揉まれていたのだが、触手が動いたたびに一夜の口からは火が付きそうなほど熱い息を漏らすようになり、無意識に唾液に濡れた舌で唇を舐める仕草に艶やかさが宿る。

「は、あ……」

大きく口を開き、肺一杯に酸素を取り込み、そして熱い息を吐く。精神的に感じているのは嫌悪の気持ちだけだ。

しかし、同年代の少女たちより明らかに女性らしく成熟した肢体は明らかな快感を覚えてしまっている。

一夜は何とか呼吸を整えようと深呼吸を繰り返すが、しかしその程度ではもうどうしようもないほど豊かな巨乳が発情してしまっているのを自覚してしまう。

それは、濡れて肌に張り付き、その見事な形、膨らみ、そして先端の勃起具合まで隠せなくなっている胸を隠す厚布の具合からもよくわかる。

元から大きな果実を二つ詰め込んだような豊かな乳房は興奮でさらに一回り大きくなり、乳首だけでなく乳輪までがぶつくりと膨らんで白い厚布の上からでも美しい桃色が丸見えの状態だ。

そして、何より一夜を苦しめるのは――。

41

42

(ずっと、胸ばっかり……っ)

もうどれだけの時間、胸を揉まれ続けただろう。

触手から出る粘液は胸や臍だけでなくスカートまで変色させるほどだというのに、しかし触手は胸を揉むことしかない。

ずっと。何度も。

根元から、乳首を押し出すように。牛の乳を搾るように。

延々と乳房を揉み続ける。

若さゆえの硬さと弾力があつた乳房はまるでパン生地のように柔らかくなり、触手の動きに合わせて千変する。

触手が少し力を籠めるだけで瓢箪のように形を変えたかと思えばすぐに元の形に戻り、とぐろを巻いて推型に尖ったとしても元の丸いお椀型に戻ってしまう。

そこまで胸を揉み捏ねられても、触手はそれ以上の事はしなかった。

「ふー……ふー……」

一夜の呼吸が長く深くなり、腰の動きがだんだんと大きく、小刻みになっていく。無意識に目を閉じて、胸を揉む触手の動きに集中してしまう。そこにはもう逃げだす方法を探す様子は完全に消え失せ、必死に快感を堪えているのか、それとも与えられる快感に集中しようとしているのか分からない。パチ、と。足元の松明が小さな音を立てた。

「あっ」

その時、触手の動きが僅かに変化した。

本当に僅か。小さな変化。

胸を揉んでいた触手がその動きを大きくし、血管のような筋が浮かんだ表皮が乳首を擦ったのだ。

乳輪を大胆に擦り、乳首の根元から頭頂までを触手の表皮が刺激する。

たった一度だけの小さな変化。

「はっ、ひう……っ!？」

今までの慣れた刺激とは全く違う激感は一瞬だけだったが、一夜はその一瞬の刺激で俯いていた顔を上げ、驚きに見開いて自分の胸を見た。

今まで何度も行った自慰の刺激とは全く違う。

何度も魔物に犯された際に与えられた感覚とも違う。

豊満で鈍感ともいえる自分の胸が、こんなにも鋭い刺激を放つのだと一夜自身知らなかつたことだ。

実際、大きく膨らみ、その内側に大量の脂肪を蓄えた一夜の乳房は鈍感だ。精々が、乳首が普通の女と同程度には敏感という程度。

しかし、時間の感覚が失われるほどの長い時間を“揉む”ことだけに費やし、張りがあつた乳房が軟体のように柔らかくなり、それでも乳首のような性感帯には一切刺激を与えなかつた触手の手管は、一夜の胸をかつてないほど敏感に作り変えてしまつていた。

ドクン、と心臓が高鳴る。

一夜は自分の胸を信じられないものを見るような目で見てしまった。

「な、なに……今の……」

胸から脳天までを貫くような快感。
一瞬で目が覚め、驚き、そして……恐ろしくなる。

(私の胸、なの。今の……?)

かつてないほどの刺激が快感だったと理解できない。

そうして一夜が驚いている間にも、触手は動きを止めなかった。

また今までと同じように、根元から先端へ、押し出すように、牛の乳を搾るように胸を揉み始める。

「ま、待って!? 待って、お願いっ!」

慌てて声を上げた一夜だが、そもそもローパーに言語と言えるものは無く、意志の疎通など同じ魔物でも不可能。

45

ローパー同士ですら何かしらの意思疎通を図っているというは聞いたことが無い。
当然、一夜の静止の声など伝わらず、触手は今までと同じように胸を揉み始めた。

「ふっ、うんん………っ」

46

声を出さなかったことが奇跡のような、今までとは全く違う激感。

胸の奥、その中心。乳首を刺激されるのはまた違った、乳房の奥から全体へ広がるような痺れる刺激。

それがまた脳天まで突き抜け、一夜は強く目を瞑って全身を震わせた。

頭上で拘束されている両手は何もないのに強く握られ、爪が手の平に食い込むほど。腰は一夜の意思を離れて勝手に前後し、その震えはあつという間に全身へ伝播する。ビクン、と全身が大きく一度、痙攣した。

全身はすぐに硬直し、一夜は閉じていた眼を見開いて天井を仰ぎ見る。何も見えな
い。真っ暗だ。

けれど一夜の視界には、まるで夜空に瞬く星のように、チカチカと光るものが見えていた。



絶頂した。

胸だけで。胸を揉まれただけで。

愛撫とも言えない、性感帯の乳首をたった一度、擦られただけで。触手が触れただけで。

一夜は絶頂し、そして全身の強張りが消えると、まるで壊れた玩具のようにガクガクと全身が震えはじめる。

「あっ、ひっ……な、にっ。なにっ、これ……っ。何これ、なにこれっ!？」

一夜本人が、自分に何が起きているのか理解できない。

胸からの刺激が強すぎて、それが快感なのだとは理解できない。鋭い痛みとなつて胸から脳天まで突き抜けると、何度も何度も全身が痙攣してしまう。

そして——そんな事など、魔物であるローバーは理解しない。

ただ、餌である一夜の汗を舐めとるために、行動を続ける。

つまり、一夜が絶頂の痙攣に全身を揺らそうと、胸に絡みついた二本の触手は変わらず胸を揉み続けた。

「やっ、めっ。——やめっ、やめっ、てっ！」

触手が胸の根元から先端へ向けて一往復。

それだけで腰が震える。全身が痙攣する。頭が痺れる。

それが延々と続く。

しかも、やはりローバーは乳首を刺激しない。乳輪にすら触れない。

ずっと胸を揉み続ける。

「やめてっ、やだっ——お願いっ、止めてっ」

ただ必死に乞うしかない。

一刻も早く、すぐにでも胸の刺激を止めてほしかった。

全身から汗が吹き出し、一夜の全身を濡らす。生死の言葉を叫ぶ唇からは涎すら飛び、視線はずっと自分の胸元を向いたまま。

街を歩けば男の欲望を向けられ、同年代の女性たちよりもはるかに大きい事が密か

な自慢だった巨乳が、目の前で捏ね回されていく——その光景から目を離せない。

けれど、一夜にはそんな自分の現状すら認識する余裕が無かった。

四肢を拘束され、ただ胸を揉まれ続ける。ローバーがすることはそれだけだ。それだけなのだ。

痛いほど勃起した乳首が胸を覆う厚布に擦れる刺激だけが、救いのように思えてくる。

何故と聞かれても、一夜には説明できないだろう。

無意識に『触れてほしい』と思っている場所が刺激されるから。それが“本能”というものだ。

気持ち良いと気付いてしまった性感帯への僅かな刺激は、しかしすぐにもどかしい刺激へと変わってしまう。

(ち、くび……乳首っ、触って、くれたら……っ)

服の下で痛々しく勃起している弱点。桃色の乳首と、興奮に膨らんだ乳輪。

規格外の膨らみを持つ乳房と同様に、一夜の乳輪は相応の大きさだ。それは触手が

それだけの時間を馳られ続けた一夜の意識が、だんだんと霞が掛かったように薄れ、一つの事しか考えられなくなっていく。
女性だからか。欲深い人間だからか。

(乳首っ、触ってくれたら……簡単にっ、イけるのになっ)

その予感があった。
以前犯されたゴブリンのように……乱暴に捏ね回してくれたら、どれだけ気持ち良いだろうか。心地良いだろうか。

そう想像しただけで、一夜は小さく、しかし確かに全身を痙攣させた。
妄想だけで浅く絶頂するほどに、今の彼女はもどかしい刺激に懊悩している。
いつしか胸を揉む触手の動きに合わせて全身を揺らすようになり、意識が胸に集中する。

足元の松明、離れた場所に転がっている愛用の大剣。
そんなものは思考の端にも浮かばない。

出す粘液と汗で濡れて透けた白布の上からでもはつきりと見てわかる。
乳首は今までの性交ではありえないほど大きく、太く勃起し、布越しでもその位置が簡単に分かってしまうほど。

その胸が、グチュグチュと卑猥な音を奏でながら揉まれている。
膝立ちの体勢で肩幅に開かれた両足は触手に拘束されながらもぴくぴくと震え、触手に支えられていなければすぐに尻餅をついてしまっていただろう。
太ももにも興奮で汗が浮くと、その汗を舐めとろうと触手が動く。

「イ……けないっ」

俯き、栗色の髪を乱しながら、一夜が呟いた。

無意識だろう。彼女の意識に、会話をするという余裕はない。

ただ、刺激が足りない。

痺れるほど、溶けるような強い刺激だというのに、もう一押しが足りない。

もうどれくらいか、洞窟に居るのかもわからない。時間の感覚は完全に失われ、今が昼なのか夜なのかも理解できない。

「ふあああ!？」

途端、興奮で艶やかに湿った唇から驚きの声が上がった。

足に絡みついた触手が汗を追って上り、そのまま鼠径部にまで移動したのだ。

乳首よりも敏感な、女の弱点。

それは一夜も同じで、陰部ではなく鼠径部への刺激だけで痺れるような刺激を感じて声を上げてしまうほど。

そして触手——ローバーはそこにも汗以外の液体があることに気付いた。

長時間の乳辱で、本人すら気付かないままうっすらと濡れていた女の弱点。陰唇。

実用性重視で選んだ黒の紐パンツは愛液に濡れても変色こそしていないが、しかし触れた触手はすぐに気付いた。

下着の下にも液体を出す場所があるのだと。

「あ、あ……だ、だめ……」

53

54

一夜の口から弱々しい声が漏れた。

涼やかだった美貌に不安の感情を浮かべ、眉がハの字に落ちる。

今にも泣きだしそうな表情で、瞳からはあともう一押しで涙が零れ落ちてしまいう……しかし頬は興奮に赤らみ、開いたままの唇からは熱く欲情した吐息が小刻みに何度も漏れ出る始末。

意思と肉体が乖離し、自分がこれからどうなるのか——何も考えられない。

(おっぱいだけでもこんななのに、そこまでされちゃったら……)

魔物相手によがるなど、剣士としてあり得ない。

だというのに、そんな思考とは裏腹に、一夜の肉体はこれから与えられる刺激を歓迎するよう勝手に腰を前後させ、股間を触手に押し付けようとしていた。

当然、ローバーに我慢する理由などありはしない。

そこに餌があるのなら、そこを刺激するだけである。

「う、うう……」

運良く触手の表面に浮いた血管のような筋に擦れると、目も眩むほどの刺激だ。

(き、もち……いい)

胸を乱暴にもまれながら、しかし下半身は一夜の意思通りに動いて確かな快感を与えてくる。

動きはだんだんと激しくなり、頭は絶頂することだけを考えるようになる。気持ち良かった。

腔から流れ出る愛液は次第にその量を増やし、黒パンツが触手の粘液と自分の愛液であつという間にびしょ濡れになる。

下着が濡れて肌に張り付くと、その下にある陰部の形をしっかりと浮かび上がらせた。

陰部の凹凸、その上にある陰核の膨らみ。

まだ触れられておらず、包皮に守られたクリトリスだったが、それでも刺激は十分である。

一夜は恥も外聞も無く腰を振り、胸を揉まれながらも何度目か分からない――全

触手は黒の紐パンツの上から陰部を刺激した。けれどそれは、胸を捏ね回す乱暴さとは違う、おっかなびっくりと言った様子の優しい刺激。

下着の上から血管のような筋が浮かぶ幹を擦り付けるだけの行為。けれど、さんざん焦らされた一夜にはそれでも十分な刺激だった。

「は、あ……あつ、あつ」

腰が勝手に前後する。カクカクと浅ましく揺らしてしまふ。

触手の動きに合わせて腰を動かすと愛液を滲ませる陰唇、それだけでなくいつの間にか勃起していた陰核までが触手に擦れた。

一夜は必死に、クリトリスを触手に擦り付けた。

これが一番気持ち良い。一番、身体だけでなく理性まで痺れる。

無意識にだろう。口元には笑みを浮かべ、犬のように息を乱しながら、一夜はクリトリスを刺激し続けた。

身を震わせた。

「は、ああ……」
(気持ち、いい……)

初めて自分の意思通りに訪れた絶頂に、一夜は目を閉じて感じ入る。
気持ち良かった。それしか考えられない。

——今までの人生で最大の充足感に浸る。

開いたままの唇からは涎すら垂らし、緩んだ下半身からは小便を漏らしたように愛液が太ももを伝って落ちていく。

腰は小さな痙攣を繰り返し、目の奥では星のような光が何度も明滅していた……。

(すご……い……)

57

58

しかし絶頂に緩んだ頭は忘れていた。

相手はローパーで、休息などありえないのだと。

「あ、う……もう、やめて……っ」

絶頂に緩んだ声で懇願する。

胸を揉む触手に。そして、陰部を刺激し続ける触手に。

十分だった。自分はもう満足した。

気持ち良くて、絶頂して、今はこの充足感に浸りながら眠りたい——そう思うほど。けれど、ローパーにはそんな事など関係ない。一夜の感情などどうでもいい。

これから、愛液という新しい餌を知ったローパーは、新しい刺激を一夜に与え続けるのだ。

十数秒の後、一夜はその事実思い至り……口元を引き攣らせた。胸と同じように、今度は下半身を刺激され続ける。

そう考えるだけで頭は冷え、しかし身体の芯は熱を孕む。

「やめ、てっ。もう、お願い……おねがいします、やめて、ください……」

その段になり、一夜は泣きながら懇願した。
頭を下げた。

身体が自由なら、土下座までしたかもしれない。

それほどまでに恐ろしかった。

延々と愛撫され続ける——絶頂しても終わらない。助けが来るまで、焦らされ、自分から腰を振って絶頂し、そしてまた焦らされるのだと……。

「はっ、は——っ！」

……それでも淫獄は終わらない。

それを理解した一夜は、必死に身体を暴れさせた。

絶頂に脱力していたが、それでも懸命に身体を藻掻かせた。

両腕に力を込めて触手を引き剥がそうとしたし、両足に力を込めて立ち上がろうとする。

——だが、ダメだ。

万全の状態でも緩む事すらなかった触手が、絶頂に緩んだ肉体で解けるはずがない。そうと分かっているにもかかわらず、一夜は暴れ、触手を引き剥がそうとする。

「ふっ、くう……っ」

そうしている間も胸を揉む触手の動きはさらに激しくなり、陰唇の縦筋に沿って動く触手の動きは大きくなっていく。

「やっ、めてっ。集中っ——でき、ないっ」

必死に触手を引き剥がそうとしているのに、腰が勝手に前後する。

触手にクリトリスを擦り付けようと無様に腰を振ってしまう。

頭の中で、目の奥で、光が明滅する。絶頂が近付いてくる。腰はさらに大胆な動きとなり、胸は厚布の下でパン生地のように捏ねられる。

「イツ、うううううっ!？」

触手を引き剥がそうと両腕を強張らせたまま、一夜は天井を仰ぎ見て、もう何度目なのか分からない絶頂を迎えた。

全身が激しく痙攣し、触手を引き剥がそうとしていた力が霧散する。

「う、うううううううっ」

一夜はすぐに理性を取り戻し、また触手を引き剥がす作業に戻る。

目には涙が浮かび、今にも零れ落ちそうだ。

唇を噛んで喘ぎ声を抑え、同時に涙が落ちるのを我慢する。

(だめ、だめっ、だめっ)

その間も、やはり触手の動きは止まらない。

焦る。焦ってしまう。

61

62

(逃げないと……逃げないとっ)

助けを待つ余裕などない。

一日だって。いや、半日だって我慢できないと理性が訴える。

焦らされ、自分から魔物に腰を振って絶頂するなど、人間としての理性が許さない。そんな未来を恐れて一夜は触手を引き剥がそうと、頭上にある自分の手首に意識を集中する。

なのに――。

(胸を揉まないでっ。アソコを刺激しないでっ)

頭の中では胸を捏ね回す触手の動き、膣の入り口とクリトリスを刺激する触手の動きを想像してしまっている。

視界に入っていないのに、今どのように動いているのか簡単に思い浮かんでしまう。一夜は勢いよく首を横に振って、その妄想を打ち払った。

そして、腕を解放することに集中する……だというのに。

「くっ、うううううううっ」

また絶頂。

その感覚はだんだんと短くなり、それだけ一夜の肢体が快感に弱くなっていつていののだと思いきらされる。

それでも一夜は諦めていなかった。

それでもまた手首の拘束を外すために腕に力を込めて、この状況から逃げようとする。

しかし下半身はカクカクと勝手に前後し、胸は最初の頃からは想像もできないほど柔らかく変質してしまっていた。

絶頂への間隔も短い。

ほんの数分で脳の奥まで痺れるような激感に襲われて脱出への意思が消え、理性を取り戻した時にはすでに腰の奥へ絶頂に至るためのもどかしさが溜まってしまっている。

63

64

(もう、だめ……なの……?)

そう考えながら、それでも一夜は両腕の拘束を外そうともがき……。

「う、ああ……?」

新しい刺激が、下半身から。

下着では吸収できなかった愛液を吸っていた陰部を刺激する触手とは別の触手が這い上がり……別の穴へたどり着いたのだ。

ローパーの餌は花の蜜や虫液体や、排せつ物。

——新しい触手が辿り着いたのは、後ろの穴。肛門だ。

「う、うう……」



一夜にはもう抵抗する体力が無かった。
気力すら尽きかけている。

だから涙を流すことしかできず、ただただ無言で腕を拘束する触手から逃れようとする事しかできない。

だがその動きすら徐々に緩慢となり、力はほとんど籠っていない。
それでも、一夜は抵抗するしかなかった。

嫌だった。

魔物に絶頂させられる——のは、もう諦めている。

自分から腰を振る——のも、もうどうしようもない。

けれど、肛門を犯される。排泄物を奪われる。

それだけは嫌だった。

腫からは意思の光が薄れ、涙が頬を濡らす。

女としてはではない。人間としての尊厳が汚される……その事が恐ろしくて奥歯が噛み合わず、ガチガチと音を鳴らす。

「ううううっ」

泣きながら腕に力を籠め、しかし一夜が触手の拘束から逃げ出すよりも早く触手が黒、パンツの中に潜り込んでそのまま肛門に触れた。

反射的に括約筋に力を籠め、肛門をキュッと閉める。

しかし、そこに自分の餌があると臭いで理解しているのか——触手は執拗だった。まるで肛門の皺の数を数えるように何度も突き、その度に肛門がヒクヒクと震えてしまう。

「やだ、やだ……やだあ……」

子供の用に泣きじゃくる一夜が、諦めて下を向く。顔を伏せる。

……と、股間と肛門を刺激していた触手が鎌首をもたげた。まるでその威容を一夜へ見せつけるように、眼前に移動する。

「な、なに……？」

今度はどんな凌辱に晒されるのか——その事を考えるだけで、一夜は言葉に出来ない不安と、そして僅かな期待に胸を高鳴らせた。

「あ、うっ……？」

服の下に潜り込み、胸を揉み続けていた触手もその動きを変化させる。

成人男性の両手でもあふれるような爆乳の根元に巻き付くと、横に引っ張ったのだ。粘液に濡れてその役目をほとんど果たせていなかった厚布の横から胸が飛び出し、肌が空気に触れる。

濡れた胸肉に涼やかな空気が触れると、改めて一夜は自分の胸を見た。

(こんな……これが、私のおっぱい……?)

鍛え、張りがあつた自分の胸。

しかし触手に揉み解され、捏ね回され、柔らかく変えられた巨乳は重力に引かれて僅かに垂れ、しかし乳輪は興奮に膨らみ、乳首は柔らかくなった乳房とは真逆に硬く

尖っている。

自分の記憶の中にある乳首より、一回りは太いような気がした。その先端にある乳腺までうっすらと見えるほどの変化に、気が遠くなりそうになる。

(こんなのが、私の胸……?)

自分の胸の変化が理解できないまま、一夜が顔を上げた。

松明の明かりの中、空中に浮いていた触手。

その先端にある桃色の蕾——それが、音を立てて開いたのだ。

グチュ、と。粘り気のある音。その表面からこぼれる粘液以上に粘り気のある、匂い立つ汚液。

ドロ、と。液体が零れ、地面に落ち——その奥には、毒々しいほどの紫色をした肉の棒があった。

表面には小さな突起が無数にあり、先端は丸い。

一夜はそれが何なのか分からなかったが、ただ——。

69

70

「くさ、い……なに、この匂い……」

嗅いだことのない匂いだったが、しかし妙に記憶に残る。

そう、どこかで似たようなことがあったような気がした。

しかし一夜がその記憶を思い出す前に、胸を揉み続けていた触手もその先端を花開かせる。

現れたのは同じ、毒々しい紫色をした肉棒だ。

そしてあろうことか、触手はその肉棒を一夜の唇へ押し付けた。

「ううう!?! や、んうう!?!」

やめて、と訴えようと開いた唇に触手が入り込む。

(にがい!?! へ、変な味……なにこれ!?!)

咄嗟に歯を立てて噛み切ろうとしたが、驚くほどの弾力で噛み千切る事は出来なか

った。

むしろその刺激が心地良かったのか、口内に入り込んだ触手はその側面を一夜の歯に擦り付け、菌頸に汚液を擦り付けようとする。

「んんう!? んむ、むうううう!!」

(やだ、やだやだっ!?)

吐き気がする。気持ちが悪い。

舌で押し出そうとしても触手の方が力強く、とてもではないが口の中から押し出せそうにない。

そうしている間に残り三本の花開いた触手がそれぞれの狙う場所へ向かって移動する。

一本は胸に。一本は膣に。そして最後の一本は肛門に。

「んむううううう!!」

71

72

この時になって、一夜は自分の両足が解放されていることに気付いた。

触手が花開く瞬間を見せつける為か、それとも逃げる気力が完全に無くなったと思っただのか、拘束を解いていたのだ。

(にげ、ないと。逃げないとっ)

一夜は膝立ちの状態から両足に力を込めて立ち上がろうとした。だというのに――。

「んんう!?!」

(そんなんっ、足っ、動いて――動いてよっ!?)

数えきれないほどの絶頂で腰が抜け、足に力が入らない。

動こうと藻掻けば藻掻くほど両足から力が抜け、触手の支えが無くなった両足は体重を支えている事が出来ずにそのまま尻餅をついてしまう。

スカートが捲れ上がり、しとどに濡れた黒下着が松明の明かりの中で僅かに顔を覗

かせる。

両端が紐で結ばれたレース地の黒いパンツ、その股間部分はお漏らしをしたかのようになり濡れで、尻餅をついた衝撃で剥き出しの地面に黒い染みを作った。

そんな下半身に向け、二本の肉棒が狙いを定める。

丸い小さな突起が無数にある、毒々しい紫色をした肉棒——その威容はゴブリンの物よりも細いが、しかし圧倒的に長い。

(そ、そんなので犯されたら……)

自分がどうなってしまうのか分からない。

逃げなければいけないのに、必死に両足を動かそうとしているのに、身体が全然言う事を聞いてくれない。

そんな自分の身体に絶望しながら、それでも一夜は必死に逃げようとしていた。力の入らない両足が地面を蹴る。

その足が、何かを蹴った——自分が愛用している大剣だ。

(け、剣！ 剣さえ、剣さえ取れたら——っ)

最後の希望に賭けて、一夜は足を大剣がある方へ伸ばした。

しかし、腰が抜けて力の入らない脚では大剣を引き寄せる事などできるはずがない。つま先が触れ、カチカチと乾いた音を立てるだけ。

そうしている間に紫色の肉棒が股間に近付き、下着の上から陰部を、そして肛門を刺激し始めた。

「あと、すこし……っ」

そう言葉にするが、実際には全然だ。

足が届いただけで、そこから大剣を引き寄せるなど夢のまた夢。それでもそこに希望があると考えなければ、一夜の精神がもたなかったのだろう——。

「駄目っ、あと少し、あと少しなの——っ」

しかし、時間切れだ。
二本の触手は器用に下着の中に潜り込むと、二つの穴に毒々しい色をした肉棒を挿入した。

「ふ、うううう!？」

何度も絶頂し、しどろに濡れ、綻んでいた膣穴はまだいい。

しかし何もされていない、固く閉じていた肛門への挿入に一夜は肺の中に溜まっていた酸素を吐き出し、それでも堪らず苦悶の声を上げた。

圧迫感と酸欠で目の奥がチカチカと光る。

絶頂の時の解放感とは全く違う、苦痛しかない挿入。

口内の触手の存在すら忘れ、舌を突き出す。

涎が溢れ、美貌が穢れ、無様な表情を晒しながら一夜は必死に肛門を閉めた。入り込んだ触手を追い出すために力むと、心地良い締め付けで膣内の触手を刺激してしまう。



「あぶ、ふっ、ふむううう！？」
(なに、これっ。なにこれ——変、だよ……っ)

尻の穴は苦しいのに、解された膣内は気持ち良い。

相反する二つの刺激を同時に与えられ、未知の刺激に一夜は悶絶した。

そんな一夜の感情など知るはずもないし、知っていても一顧だにしないローパーは膣と肛門の触手を交互に動かし、柔らかに揉み解した胸を楽しみ、口内を蹂躪する。

触手の支えを失い、地面に仰向けになったまま全身を颯られる。

神職を連想させる紅白の衣装はその全部が穢れた魔物の体液で濡れ、肌に張り付き、全身から異臭を漂わせる。

いつの間にか両腕の拘束も解かれていたが、そのころには一夜に抵抗する体力、そして気力も残っていなかった。

膣、肛門、胸、口。

更に二本の肉棒が追加され、その二本は開いていた片方の胸と、そして口内へと入り込んだ。

小さな口に細いとはいえ二本の触手が挿入されると、頬を膨らませ、美貌を無様に歪ませる。

頬を内側から膨らませ、酸素を取り込むため必死に鼻を膨らませる姿はただただ滑稽で、一夜という美女を知っているものなら目を疑うような光景だろう。

「ふー……んふううー……」

二本の触手が狭い口内を交互に蹂躪する。

片方が奥へ進めば、もう片方が出口へ向かう。

その度に口を塞がれている一夜はくぐもった声と鼻息を漏らした。苦し気に……そして、酸欠に陥ると瞳は白目を剥き、意思の光が消え失せる。

完全に気絶して、しかしそれでもローパーの凌辱は終わらない。

しかし、幸運なこともあった。

肉棒を咥えこんだ二つの穴は、一夜の肉体を守るためか、それとも一夜に凌辱される才能でもあったのか。

穴は触手を程よい刺激を与えながら包み込み、むしろ奥へ奥へと導くように蠢動す

るようにすらなっていた。

それが良い事なのか、それとも悪い事なのかは測りかねる。

ただ、白目を剥いて気絶している一夜の口からは徐々に苦悶の声が消えていく。

「あ、う……」

そして、ようやくローパーはその六本の触手を一夜の肢体から抜き取った。

満腹になったのだ。

すでに洞窟の外は深夜を過ぎ、早朝という時間帯。半日以上を凌辱され、命を留めたことが奇跡か。

……解放された一夜は地面の上で仰向けのままびくびくと痙攣し、意識が戻る気配は無い。

そのまま眠りに落ち、体力を回復させ、もしかしたらこの洞窟から逃げ出せるかもしれない。

「グギ」

79

しかし、そんな一夜の元に向かう小さな影があった。

一夜の襲撃を受け、生き残ったゴ布林だ。

一匹は無傷。もう一匹は気絶から回復したのか、頭には血の跡が残っている。

仲間の復讐——というわけではない。

そんな事よりも、目の前に……汚いが、使える穴が転がっているのだ。

ゴ布林はそのまま気絶している一夜に覆い被さると、一晩中ずっと触手を啜えこんで通常より広がった女剣士の腔穴に自分の陰茎を突っ込んだ。

「グギッ！！」

少々緩いが、暖かく、濡れていて、気持ち良い。

頭に傷のあるゴ布林は一夜の頭を乱暴に掴み、その口に自身のモノを突っ込む。

二匹のゴ布林は腰を前後させ、そしてすぐに一回、絶頂した。

意識のない一夜の腔と口に出しすると、射精したチンポを抜かないまま、また腰を前後させ始める。

80



次は、さっきよりもずっと長い。
一度射精して、気持ちが悪く落ち着いたのだ。
半日以上も松明の明かりに照らされる一夜の痴態を見続け、溜めに溜めた魔物の欲望。

「グフ、グヒヒッ」

「ギヒイイイ、ヒイイ！」

ゴブリンは二度目の射精をすると、一度チンポを抜いた。
今度は下半身にある二つの穴だ。

二匹のゴブリンは協力して脱力している一夜を持ち上げると、一匹は膣に、そしてもう一匹は肛門に。

やはり触手を咥えこんでいた肛門も緩まっております、こちらは元が狭かっただけに丁度良い締め付けだ。

「あ、う……やめ、もう……やめ……」

気絶しながら、一夜が無意識に呟いた。
これから二日。

仲間が助けに来るまで、一夜はローパーに凌辱され、解放されたらゴブリンによって凌辱され、交互に犯され続けた。